

新聞記者に共産党員がいるから気をつけろ」と、転任してくる官公署の署長にそう注意した。前橋支局長(根本三郎氏)は、支局次長を中之条へやり調査させた。支局長は本社の地方部長へ報告した。地方部長は佐藤三郎氏(喜平を毎日に入社させた人)で、父に親展をくれ始めて喜平のめぐりで大騒ぎしているのを知った。手紙で「さてこれはある方面から耳へ入ったのだが、何かの間違いであってくれれば良いかと思っている次第。それは君が共産党と深い関係にあるというのだ。もちろん個人の自由であり君の信念をもってこれに進んでいるものなら何をかいわんやだ。ただ義理にからまるとか、その他軽い動機からのものであり、絶縁できるものならば考慮を煩わしたいものと思つて筆をとつた次第」。父は驚いた。いつの間にか喜平のめぐりがんじがらめにしていたのだ。深い関係など持ちよう筈がない。やがて吹きつけるレッドパージの嵐に身を揺さぶられたのであるが、鏡に照らし白髪を見る感が深い。

そんな情況の最中、冤罪を被る事件にぶつかった。それは昭和二四年四月末のある朝、中之条警察署に行くとき署員が集まって何かを読んでいた。のぞき込むとある人からの手紙であった。内容が面白いので毎日紙面の「坂東太郎」欄にもらった。それが報道されると署長

は、「他人の手紙を無断で見た」と言いがかりをつけてきた。「それは違う」と言つたが聞き入れようとしない。「他人の所へ来た手紙を勝手に開封していいのか」、代田実署長はそう言う。

「それじゃあ、私を泥棒だと言うのか」

「まあそういうことになるかね」

それは誤解だ、と弁解したが聞く耳を持たなかつた。挙句の果てに泥棒呼ばわりするのである。「署員が見せた」と言つたが、誰が見せたかは言わなかつた。あとで迷惑が及ぶようでは悪い。見せたことは事実だ。

署長は署員を調べもしないで人に罪を負わせていいのか、泥棒だったら逮捕でも何でもしたらいい、と捨てばちになった。署長がその気ならこちらもその気になる。以来署長とは口を利かない。一切ノーコメントだ。すると有力者が集まつた席で、父の悪口を言う。ハラが小さい、とかなんとか、側面攻撃だ。でも父は黙つていた。そうこうしているうちに、代田署長の失言問題が持ち上がった。その内容は長くなるので割愛します。代田署長は、けん責処分を受け他へ転じてしまった。

喜平への圧力はなぜ

昭和二二年八月の報道でハンセン病療養所の現状を世に知らしめ、療養所の民主化に貢

献し、今迄の療養所の運営を全否定した。

昭和二三年一月〜二月雑誌『大衆クラブ』に「実話小説特別病室」を連載。《※この頃より喜平は進駐軍に目をつけられる》

昭和二五年一月、書き下ろし二本を加え『特別病室』を出版。《※前年からの警察の圧力でハンセン病の記事が書けなくなり、それならばと自費で『特別病室』を出版し世に知らせようとした。》

昭和二六年、突然進駐軍GHQが喜平を調査に来る。『特別病室』の一部に伏字の強制を受ける。同時に毎日新聞本社より転勤の話が来る。前橋支局を一年間勤めその後毎日新聞本社社会部勤務にする辞令だ。しかし喜平は子ども(長男の私・光)の病弱を理由に断つた。何としても吾妻の記事が書きたい、特にハンセン病問題は絶対に書きたかつた。

毎日新聞本社にもGHQの圧力がかかつていたのだ。父の理解者である佐藤三郎地方部長が盾となり、父の転勤の話は立ち消えとなった。余談ですが、母の話しでは転勤命令の翌月より給料が下げられたと言っていました。

父喜平は、国家権力の巨大さ、抗えない無力さを思い知らされた。様々な圧力が父にかかつていたと思われませんが、ハンセン病関連への弾圧はすくく、父は多くを語ろうとはしま

せんでした。

家族のことを思い、仕事を思い、ハンセン病患者を思い、白髪になるほど悩んだ栗生楽泉園の記事を昭和二五年以後、書けず、生涯悔やむこととなる

次回「息子と楽泉園へ」に続く

~~~~~

## ■湯ノ沢地域フィールドワーク開催

大島一弘



案内を務める松浦信司祭

二〇二六年四月一八日、湯之沢地域と楽泉園の歴史を学ぶフィールドワークが開催されました。

当日は、草津の「リーかあさま記念館」にお昼に集合。二七名の参加ということで盛況でした。記念館に隣接する、マーガレット館で昼食をとり、その後二つのグループに分かれて一三時半頃出発。聖バルナバ教会司祭の松浦信さんの案内です。

まず第一グループはコンウォール・リー女史ゆかりの頌徳公園、第二グループは「リーかあさま記念館」で、それぞれ約一五分の説明を受けた。その後、徒歩で大滝の湯の方向に向かって移動。時折このあたりが境界だとかの説明、時間の都合で一部割愛すること。



「湯ノ沢橋」との表記がある  
(文字が分かるように画像を加工)

現在、湯ノ沢という地名を文字で確認で

きるのは、ここだけです。と湯川にかかる中和工場の石灰を投入している場所の少し上流にかかる「湯ノ沢橋」のプレートを確認。そこには、はっきりと「湯ノ沢」がみてとれる。次に四国の八十八箇所霊場の模した場所に移動。そこには、小さな建物が建ててあり、中には、それぞれの土か石とかが入れてあるらしい。ここも時間の都合で通りすぎる程度だった。



荒れている共同墓地

次は、車で移動。湯ノ沢時代の共同墓地である。草津町の火葬場に隣接するところに石塔がたててあり、その場所は、草が生い茂り、木の枝が落ちていたり、少し荒れているようだ。最初の目的では、その除草などを考えていたが、今回は省略。その後、車で楽泉園内の中央教会館の駐車場に移動。徒歩で、園内の聖慰主教会まで移動。今回は特別に中に入らせてもらい松浦さんの説明を聞く。ここが今

回のフィールドワークの最後です。私もコロナ以降初めての立ち入りです。以前はあちこち行ったのですが、あまりの変わりように驚きでした。ここまで約四時間弱の行程でした。急いでの行動であり、本当に下見程度の内容です。

今回が初めての参加という人もいたみたいですね。それぞれの場所にもう少し時間をかけて、事前学習なども含めてまた企画したらいいと思います。

湯ノ沢の詳しくは次号以降の「人間」で説明できればいいのかな、なんて思いました。

以下、フィールドワーク参加者の感想文です。

#### ◎F・Y

貴重な体験の企画をありがとうございました。

立って歩く時間の長さを知らぬがゆえに参加でき、記憶に残る景色を見ることが出来ました。(当初計画された)フィールドワークとしての墓地の清掃の話は、企画はとても良いと思いました。自分中心に思うと高齢者過ぎて、内容を明確にして、若い人を誘い学んでいただく機会にと思いました。

ともに生きる会の存在は素晴らしいし、貴重に思います。これからの未来に民主主義の

ために、一層重要になっていく活動(地震の教訓を生かすとか、気候変動対策などのように)。人間の心の豊かさを高める継続性があると思います。

#### ◎F・i

資料で見るだけでなく、実際の場所を説明を聞きながらまわるのが楽しかったです。裏話や貴重な資料もいただきありがとうございました。入園者も年々減少していく中で、風化させない、記録作りや「語り部の会」のように生の声を聞かせていただけるといいなと思います。

#### ◎西沢美千代

今回この様な企画に参加できました事、とても貴重な体験で、華やかなイメージの草津という場所に、涙を流した方達も沢山いたこと、それはあまりに筆舌に尽くしがたい歴史です。温泉に来る方々が一人でも多くこの事を知る機会があれば良いのになーと。

(案内の)松浦さんに個人ではとても通らなかったであろう細かな道や、それぞれの場所に時間の許す限り案内していただき感謝の限りです。

リーかあさまも、とても慈悲深い真心で、誰に対しても差別することなく他国の方に接

しておられた事、同じ事が私に出来るだろうかと、どうしたらあの方々に少しでも近づけるのかな…と考えさせられました。

今回、スケジュールの事などいろいろな意見もあったかと思いますが、私としては、とてもありがたい一日でした。企画するだけでも大変だと思います。本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。



リー女史も眠る  
聖バルナバ教会納骨堂

#### ◎関光

父喜平のハンセン病に取り組む出発点となった湯之沢集落を見学でき、良かったです。父は昭和一五、一六年と同集落取材し、ライ病は伝染しない(注)、ライ菌は非常に弱く、冷たい風に当たっただけで弱る(死滅する)等を取材で判った。なぜ同集落に興味を持ったのか。弟、姉を肺結核で亡くし、強く伝染病に関心があり、恩師であり父とも慕う小暮三四

郎師の影響が大きかった。

(編集者注…ハンセン病はらい菌による感染症です。正確には「伝染しない」は誤りですが、感染力は微弱で、現在「うつる」心配はほとんどありません。たとえ感染があっても、現在の栄養状態・衛生環境ならば発症することはほとんどありません。その意味で「うつらない」とは言えます。)

## ◎M・T

今回湯ノ沢部落を訪れ、その歴史を学ぶのは初めてでしたので、参加出来て良かったです。資料も豊富で松浦先生のガイドも丁寧だったので、これまでより深く草津町とコンウォール・リー氏とハンセン病の患者さんの関係を知ることが出来ました。

差別偏見を無くすための取り組みは、群馬県内の医療や福祉団体、教育委員会、人権団体、地元草津町等と協力して人権教育啓発活動を継続して開催することが重要だと思います。その意味で今回のようなフィールドワークや講演会、研修会の開催、栗生楽泉園の文化祭や語り部の会などにより多くの人が参加し、当事者との交流の機会も設けた方が良いかと思います。

現在、草津バスターミナルから療養所までのアクセスが悪いため、見学の機会が失われている状況があるので改善が必要です。草津は温

泉が有名ですが、ハンセン病療養所があることを知らない人が多数います。博物館や歴史館などを訪問したい人にも草津町とハンセン病の関係を学んでいただき、人権教育の場になることが、差別や偏見をなくすことに繋がります。

《この模様は四月一九日付

上毛新聞でも報道されました。》

## ■栗生楽泉園ハンセン病フィールドワーク

「マイナス七℃の極寒の中で行った

五感で感じる体験学習」

群馬民医連

冬晴れの一

月二二日、人権と公正の視点を学び、ハンセン病患者・元患者らが受けた過酷な収監と差別の歴史を知ることを目的に、二回目の栗生楽泉園フ



ィールドワークが行われ、参加者は四〇人でした(利根一八、とね虹の会二、北毛四、はるな三、群中九、協同福祉会二、県連二)。午前中は、歴史館・重監房資料館を見学。復元重監房の真つ暗な室内で収監された環境を体験しました。また、様々な資料の説明を受けた後には、納骨堂で墮胎され亡くなった子どもや故郷に帰ることが叶わず亡くなった元患者らの供養を行い、雪に埋もれた重監房跡地を見学しました。午後は、「群馬・ハンセン病問題の真の解決をめざし、ともに生きる会」の大川正治事務局長のお話を聴くなど、国策としておこなった差別や隔離、過酷な収監について学びました。参加者からの感想です。

## ◆利根中央病院 看護師

M・H

「ハンセン病とはなにか？」今回の栗生楽泉園FWに参加し資料館での展示品や再現映像、大川さんや現地スタッフによる説明を通して、その深刻な実態を知りました。

栗生楽泉園は、観光客で賑わう草津町から少し離れた閑静な一つの集落として木々に囲まれた所にありました。当時は、「らい菌」に感染することで外見的变化が現れるため人々に恐れられ、ハンセン病患者は全国一四箇所(編集者注…国立一三箇所、私立一箇所)に